

平成15年度教育振興運動推進事業 読書啓発メッセージ作品集

# 『読書のススメ』

～子どもたちへ そして 親たちへ～



岩手県教育委員会



読書活動は、子どもが言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、想像力を豊かなものに、人生をより深く生きるための力を身に付けて行くうえで、生涯を通じ欠くことのできないものです。

今回、県教育委員会では、より多くの子どもたちが、本とのよき出会いができるように、また、読書習慣が身に付くようにとの願いから、広く県民の皆様に、読書の魅力を語るメッセージを募集しました。子どもたちに対するメッセージはもちろんのこと、幼児期からの読書習慣の重要性を考え、お父さんやお母さん方に対するメッセージ部門も設け、子育てへの応援メッセージもかねて寄せていただきました。

県内各地の小学生から八十代の方まで、幅広い世代から、計二百九十六点の応募をいただきましたが、どの作品も自らの体験を通じた貴重なメッセージであり、審査も難しかったですと聞いています。

全校朝読書に取り組んでいる大槌町立吉里吉里中学校のみなさんからは、「苦手だった読書が、いつの間にか自分にとってかけがえないものになった」という内容の作品が多く寄せられたことが印象的でした。

この冊子は、県内の保育所や幼稚園、各学校、図書館、公民館等に配布し、多くの皆さんに目を通していただきたいと考えています。そして、子どもたちの豊かな成長を願う、心のもったメッセージが、皆さんの心に伝わることを願うものです。

発刊にあたって

岩手県教育委員会 教育長

佐藤 勝

『子どもたちへ』の部(子どもたちへのメッセージ)

【最優秀賞】

- 本から学ぶこと . . . . . 一戸町 苗代幅 桃子 1
- 「本は心のよりどころ」 . . . . . 一関市 菅原 雪枝 2

【優秀賞】

- あなたの「お気に入り」 . . . . . 盛岡市 藤村 由美 3
- 「二人兄妹のお兄ちゃんへ」 . . . . . 湯田町 高橋 洋子 4
- 読書の大切さ . . . . . 盛岡市 佐藤 裕貴 5

【佳 作】

- 本当に大切なものを見つけるために . . . . . 北上市 島田 清子 6
- 大冒険の国へー本のとびらを開こう . . . . . 二戸市 内田 孝次 7
- Let's (レッツ) 探検！ . . . . . 滝沢村 武田 唯 8
- 「心の夢の翼を」 . . . . . 盛岡市 中村 恵 9
- 読書のすすめ . . . . . 遠野市 千葉 理市 10
- 元気つけてくれる本 . . . . . 盛岡市 永田 恵里佳 11
- 読書ってこんなところがいい！ . . . . . 盛岡市 湊 由起子 12

『お気に入り』を見つけてみませんか？	江刺市	佐藤真理	13
読書好きへの変化	大槌町	竹澤夏美	14
「本を好きになって思うこと」	大槌町	三浦明日香	15
「ことばの旅を」	盛岡市	安保位子	16
「きつと気にいる本がある」	江刺市	後藤明美	17
本は自分	久慈市	畠山タイ子	18
勇気の裏側	盛岡市	太田原有希	19
出口を	釜石市	小笠原ヒナ子	20

『親たちへ』の部（保護者等へのメッセージ）

【最優秀賞】

孫と祖母の読書	矢巾町	菅原千代子	21
読み聞かせから始まる活字とのふれあい	盛岡市	齊藤博孝	22
「読んで」	玉山村	高橋加菜映	23

【優秀賞】

「親子読書」のおすすめ	一戸町	鈴木尚枝	24
「読書の鎖」	石鳥谷町	佐々木さつき	25

【佳作】

「十五分の子育て」	盛岡市	佐藤淳子	26
絵本の楽しみ	前沢町	村上あゆみ	27
「子ども時代への鍵」	千厩町	片野裕子	28
わが子を本好きにするために	遠野市	佐藤園子	29
「母から子への贈り物」	花巻市	鎌田智子	30
『子どもを本好きにするために…』	紫波町	後藤尋子	31
今日もまた、子供と一緒に	盛岡市	丸山ちはや	32
「一日十分間」の読み聞かせ	一戸町	千葉典子	33
甦る母へのおもい	陸前高田市	中山圭子	34
「八時の約束」	盛岡市	柴本弘子	35
絵本は心のつぼみ	東和町	及川典子	36
「読書遊びのひとつとして」	久慈市	矢幅寿美	37
「大人でも感動できる絵本」	東山町	臼井昭二	38
幼い世界の読書論	宮古市	前川克寿	39
「老いても心は豊かに」	盛岡市	佐藤セツ	40

本から学ぶこと

一戸町立鳥海中学校 三年

苗代幅 桃子（14歳）

「何でそんなに本を読むの?」とよく友達に言われる。私はいつも決まってこう言う。「好きだから。」「よ。」

本は私の先生だ。小学校四年のころ「五体不満足」を読んでから、私は変わった。乙武さんに頑張ることの大切さ、自分にしかできないことを探す大切さを教わった。

本を読んで、素直に泣けるようになった。主人公の気持ちを自分のことのように考えられるようになった。友達の気持ちもわかるようになってきた。そして、自分自身を大切にすることを知った。

どんな本も、私にたくさんのことを教えてくれる。本を読むことは、私の生活の一部だ。休み時間、帰宅してから。ベットの途中で。あらゆる時間を使って、私は本と一緒に過ごしている。

そして、これからも私は、本とともに歩んでいきたい。

「本は心よりもじょうず」

一関市 菅原 雪枝（35歳）

私が赤毛のアンの本と出会ったのは小学校の頃、姉が古本屋で買ってきた文庫本でした。それ以来アンの夢中になり、モンゴメリーの作品は全部読みました。その中に出てくるケーキやいちこのソーダ水が作りたくて、お菓子の本を見ながら何度も作りました。失敗の連続でしたが、そのお陰で(?)今は食に関わる仕事をしています。アンの懐かしく、温かい世界は私が物事を考える時の原点になっているような気がします。

本は自分の知らない世界を広げてくれるし、いろいろな心の動きを経験させてくれると思います。そして、ちょっと落ち込んだ時には本を読むことで勇気づけられます。

読書によって、人を思いやる気持ちやいろいろな考えがあることを知り、仕事にもすこく役立っていると思います。

今は忙しく、なかなか読書をする時間が取れませんが、本は私の心よりもじょうずです。

あなたの「お気に入り」

盛岡市 藤村 由美（44歳）

見て、手に取って、なんだかいいなあ、これ、と思ったら、その本はもつ、あなたの「お気に入り」。何回だって開いていいんだよ。表紙の絵が好き、手に取った時の感触が好き、さし絵の中のこの色が好き、書かれている文字の形が好き、このフレーズはいいなあ、ストーリーがじんときくる…それって全部「お気に入り」。

「またその本読んでの？」、「同じ本ばかり。」って言われても、気にしなくていいんだよ。だって、「お気に入りの本がある」って、とってもすばらしいことなんだから。

忙しい毎日なもの、「お気に入りの本」のことを忘れてしまうことだってある。でも、きっと、ふとした瞬間に、その存在を、忘れていた気持ちや情景と共に思い出し、ちょっとり幸せになるはず。

さあ、あなたのお気に入り、どの本ですか？

「三人兄妹のお兄ちゃんへ」

湯田町 高橋 洋子（40歳）

あなたがお母さんのお腹の中にいた時、本が好きになるように絵本を読んであげた。生まれてきたあなたは、お母さんのお腹で聞こえなかったのか、聞いていなかったのか、あまり絵本に興味を示さなかった。

だけど、妹が生まれたらあなたはおほつかない言葉で、妹に絵本の読み聞かせをしていた。妹は絵本が大好きになった。あつという間に一人で本を読むようになった。あなたはというと、相変わらず本を読んでいる姿を見かけない。だけど、また妹が生まれると、寝てばかりいる小さな妹の横で、あなたは絵本を開いて読み聞かせ。その妹が今では絵本を抱えて次から次へと読んでと持ってくる。

あなたは読書をするとき、自分の部屋で静かに読んでいたんだね。学校の読書記録を見ていっぱい本を読んでいることも知ったよ。それに、妹たちが絵本大好きなのは、やっぱりお兄ちゃんのおかげだね。ありがとう！

## 読書の大切さ

盛岡市立城南小学校 六年 佐藤 裕貴（12歳）

伝記を読むと、自分だけの人生だけでなく、他の人の人生も歩むことができる。他の人の生き方を見ると、「こんな風にたくましく生きているんだ。」と思い、なやんでいることも少し楽になった。自分の思っていることがうまくいかなかったり、やるつと想っていることが出来なくてなやんでいる時、伝記を読んだ。ほくよりつらい目にあっても、くじけずにかんばっているところを見るとなやみも楽になった。

本をたくさん読むには、あまり読んだことのない種類の本に目標をたてて、読むといい。実際にはくは、字も多いし長いので、あまりすぎではなかったが、目標をたてて読んだら意外におもしろかった。さらに、読んでいるとき、おもしろい本を見つけると、もっとすきになる。この方法を続けていけば、たくさん本を読めると思う。

## 本当に大切なものを見つけるために

北上市 島田 清子（67歳）

私は、子どもたちからたくさん感動をもらった元先生です。そんな子どもたちに、お返しの言葉はと言われたら「本を読んでね。」の一言です。

今は秋。少しとんぼの話をしましょ。空を飛んでいるとんぼの中にも変わり者がいます。トンちゃんがそつでした。他の者と一緒に飛んだり、遊んだりしないし、いつも何か一人で考えているようにでした。おせつかいな赤とんぼが、「トンちゃん、いつも何か一人で考えているの。」「と言っても、「うっん、何も考えてなんかいやしないさ。」「と答えるのですが、実は『空の色はどうして昼は青く、夕方は赤く、夜は黒くなるのかしら。』などと考えているのです。（以下省略）さて、この続きは図書館で読んでね、と話しみんなで「赤とんぼ」の歌を歌いました。

それからの子どもたちは、とんぼの本をたくさん読み「とんぼ博士」なんて言われる子もでてきました。

本当に大切なものは目にも見えず、手に取ることも出来ないものです。読書はそれを与えてくれるのです。子どもの頃に感じたことは大人になっても消えない宝物です。

子どもたちよ、「本を読んでね。」本から「大切なもの・美しいものを培って下さいね。」

さあ、冒険の国へ

本のとびらを開こう

二戸市

内田 孝次（47歳）

あなたたちは、モモを知っていますか。何よりも友達を大切に、時間どろぼつたちから世界を救った子どものことを。そして、ふしぎな小人の世界から、仲間たちと冒険へ旅たつネスナイカのことを。

あなたたちがまだ見たことのない世界が、本のとびらの向こうに広がっています。いっしょに、冒険に旅たちましよう。

子どもときに出会った本は、きっと大人になっても忘れることはないでしょう。いつも心の中にいて、あなたの仲のよい友達のように話しかけてくれることでしょう。

そして、あなたが大人になった時、その本をひらいたら、子どもときに出会った友達にまた会えることでしょう。

それはなんとすてきなことが。

さあ本のとびらを開こう。

Let's (レッツ) 探検！

滝沢村立柳沢中学校

二年

武田 唯（14歳）

「読書」ってなんだと思う？ ただ字の通り本を読む事だよね。でもね、私はそれだけじゃないと思うんだ。私はね、小学校一年生の時から小さい字の本を読んでいたの。なぜかっていうとね、私はその本の表紙と題名で「おもしろそう」って思ってしまうからなの。

本は読むものでもあるけど、最初に読みたい本を選ばなきゃいけないよね。私は読む事も好きだけど選ぶ事はもっと好き。だって私の大好きな宝物を見つけるようなんだもの。そしてやっと見つけた宝物を開ける事もとっても好き。

だから、みんな早く自分の大好きな宝物を見つけてみて。その宝物もきつとじーっとみんなの事、待ってるから。

見つけに来る日を…ね！ としてもう一つ、宝物にはいつもおまけがついてるよ！

## 「心に夢の翼を」

盛岡市 中村 恵（38歳）

本を読むって、最初は絵本からかな。絵のある本は、なんだか得した気分でも、お話を読み聞かせてもらう時は、聞いているだけで想像がどんどんふくらんでくるよね。絵がなくても、文章からだんだん想像がふくらむようになるの。それでね、いつの間にかお話の主人公になれちゃうんだよ。飛行機に乗らなくなつて、空も飛べるし、宇宙にも行ける。コロボックルにもなれるし、巨人にもなれる。外国へ行くのも簡単だよ。本を読むって、学校の勉強の続きみたいに感じるかな？ もっとやさしいことなの。本は、心の栄養。一杯本を読むと夢がたくさん持てるようになって、心が楽しくなってくる。ほら、あなたの心に夢の翼がひろがった。

## 読書のすすめ

遠野市 千葉 理市（63歳）

『がんばらない』。ちょっと変わった題名に惹かれて読んだ本。歳のせいで弱った涙腺から出る涙が止まらず困りました。死を間近にして、最後の生を自分らしく生き抜こうとする患者と、それを支えケアする人々の姿。そこには、「治す人」と「治してもらう人」との上下関係は介在せず、人間愛に満ちているのです。人間って何んて素晴らしいんだろうと改めて考えさせられる感動の涙でした。六年前癌の手術を受け、それ迄ひとごとだった「死」が急に身近なものと感じられた時、私は困惑と無力感に苛まれました。その時、立直りの慰みと力になったのも読書でした。

人間が生涯、体験によって会得する知識、知恵は限られますが、本によって様々な人の思考や経験に触れることが出来ます。そのとき感動し共感したものが、自分の知恵となるのだと思います。日頃思い描いていた思考に光を当てるもの、それも読書です。

読書で得た経験や多くの感動は、きっと人生を豊かなものにする筈です。



元気づけてくれる本

盛岡市立城南小学校 六年

永田 恵里佳（12歳）

本は読む人の心を動かす。そして、とりこにしてしまう。そんなみ力があなたにはあるよ、『本』さん。

こんなみ力が本にはあるから、自分の今の気持ちを変えたい時、その気分に合わせて本を読んで、スッキリすることもある。読んだ時、自分をとっしょう人物だと思いつつ人物だと思いつつ読んでは、結末によってほっとしたり、イライラしたり、静かな所で読んでいても、にぎやかな場面だと読む人を楽しませて、静かなのに、にぎやかな気がしたりする。そんな本を読むと、いくらさし絵がないものでも、止められなくなるくらいになる。そうやって本は、想像力を豊かにするだけでなく、読む人の心を動かす、元気づけてくれる。

こんな本が私は好きだ。これからも、本を読みたくなるとき、元気づけてくださいね。『本』さん。

読書ってこんなところがすごい！

盛岡市立城南小学校 六年

湊 由起子（12歳）

本を読んでいくうちに、このページでは主人公はこんな気持ちなんだろうな、とか主人公はどうしてそんなことをするんだろう、次のページではぎつとこんな話になっていくのかなと私の気持ちは、ページを追うことにふくらむ。絵があまりない本や絵がまったくない本は、もっとみ力的で絵がうかんで読書の楽しさが広がる。

私が本をとても好きになったのは、ある一さつの本がきっかけだった。その本は「にじとそら」という本で、内容は、主人公の女の子がある日、鏡の向こうにいつてしまつて、そこから自分の家に戻るため、冒険する話だった。

どうして興味を持ったかというところ、女の子がどうやってでも家に帰れるようにと広い広い野原を歩き回ったり、悪い魔女に立ち向かったりするところが、必死な姿を想像することができたからだ。

読書は、いろいろなことを想像できたり、この世の中ではありえないことが起こったりして、とてもみ力があると思う。

『お気に入り』を見つけてみませんか？

江刺市

佐藤 真理（27歳）

みなさんには何度読んでも心が安らぐ、お気に入りのお話（本）がありますか？ 私は小学校2年生の国語の教科書にものっている「おてがみ」というお話が大好きです。一度も手紙をもらったことがない「がまくん」に、友だちの「かえるくん」が「君と友だちでよかった」と書いたおてがみを出す、という2匹のかえるの友情の物語です。

「おてがみ」との出会いには私が小学校に教育実習に行った時のこと。先生が朗読し終わった時、かえるくんの思いやりと、友だちがいいなあという思いに、授業中であることも忘れて思わず涙ぐんだことを覚えています。それ以来「おてがみ」は私のお気に入り、落ち込んだ時に私を励ましてくれる『元気の素』なのです。お気に入りのお話（本）はいつも自分を励まし、心を豊かにしてくれます。そしてそれは意外と身近なところに隠れているものです。教科書の中かもしれないし、押し入れの中で埃をかぶっているかもしれない。ちょっと身の回りを見わたして、目についた本を手にとってみてください。きっとあなたのお気に入りが見つかるはず……。

読書好きへの変化

大槌町立吉里吉里中学校 二年

竹澤 夏美（14歳）

読書は嫌いでした。中学生になってから小説を読み始めました。初め、どの本を読んで良いのか分からず、有名な小説家の本を買いました。しかし、とても難しくて二行で終わりました。

人間にはそれぞれの個性や好みがあります。小説家にもそれぞれの好みやこだわりがあり、書く内容が違うと思います。

友達がすすめる本を読んでみました。しかし、自分の好みには合いませんでした。

まず、一人一人が自分に合った本を探さなければいけないと思います。私は、テレビで放映されているアニメを見ました。おもしろかったので、発売されている本を買いました。また、注文用紙に書かれていた紹介文や表紙を見て買いました。

最近、本を読むことが好きになり、読書の時間が楽しみと思えるようになりました。皆さんも自分に合った本を見つけ、読書を好きになるように、がんばって下さい。

「本を好きになって思うこと」 大槌町立吉里吉里中学校 二年 三浦 明日香（14歳）

前まで本を読むということが嫌いでした。

でも、『ダレン・シヤン』や『ヘレン・ケラー』という本を読んでいくと、いろいろな想像や感情を持つたり、疑問を持つたりして本を好きになりました。

本からいろいろな事を学びました。例えば、読んだ人にしかわからない感動やおもしろさ。そして、作者が一番読み手に何を訴えたいのかなど、いろいろな事がわかったりします。本が嫌いだった頃は、「どうせ読んでもつまらない、楽しくない」と思うことばかり考えていました。

今の私は違います。何の本を読んでも楽しいし、おもしろかったりします。時には、その本を読んでも人に優しくできたり、勉強や部活もつまくいたりする時だってあります。だから本は、すごい力を持っていると思います。今、こうして読書をしている時間もとっても大切な時間だと思っています。本が嫌いな人も一冊でもいいから読んでみてください。

ことばの旅を

盛岡市 安保 位子（49歳）

本が好きなあなたも、本はめんどくさいから読みたくないあなたも、ちょっとだけ思い浮かべてみてくださいね。おにぎり、おむすび、おじぎり、さあどんなお話が頭の中に浮かんできましたか。教科書にある『おむすびころりん』や『一つの花』の中に出てくるおにぎりは、おむすびだったり、おじぎりだったり。本の中ではその作者の思いで一つのことばが様々な様子を見せています。読書をしながら七変化をすることはの旅を楽しむことができます。

あなたの好きなことばは何ですか。あなたが知っていて気になっていることばはありませんか。たとえば、『お手紙』にでてくる「がま」「くんと」「かえる」「くん」、どこが違うのか辞典や図鑑で調べてみたくありませんか。あなたのこだわりで、「好きなことば」「や」「気になることば」をテーマにして本を選んで、不思議な不思議なことばの旅を楽しんでみませんか。

「きつと気に入る本がある」

江刺市 後藤 明美（38歳）

子供の頃、誕生日プレゼントはいつも本だった。それは、課題図書や推薦図書などで、正直私には興味を持てる作品ではなく、一冊読み終えるのに時間がかかったので、うれしい反面、結構苦痛に感じたのを覚えている。私が、無類の本好きと知っていたの両親からのプレゼントだったのだが。私が好きで読んだのは、「ファーブル昆虫記」や「ドリトル先生」のシリーズ等で、どちらかというと男の子向けだったのかもしれない。

読書とは、自分で本を手にとって選ぶことから始まるのだと私は思う。だから、回りから与えられたものでは読書を決して楽しいとは思えないし、好きにもなれないのだと思う。

いまいち「読書なんて」と思っている君、まず目についた本を手にとってみるといい。表紙がきれい、タイトルが気に入ったとかそんな単純な事でもいい。そして、本を開いたとき、きつと今まで知らなかった未知の世界に君を誘ってくれるだろう。

本は自分

久慈市 畠山 タイ子（57歳）

本、好きですか。

本の世界、そこは宇宙・未知の空間。

昔話、それは、現在へのメッセージ。

本を読むと、私、行ってみたいくなります。

龍宮城・鬼が島・スズメのお宿・天の川。

私、会ってみたくありません。

牛若丸・一寸法師・一休さん・七人の小人・あまんじゃく・あかつこ太郎・親指姫。

私、ほしくありません。

お菓子の家・ききみみずきん・千里のくつ・打ち出の小づち・ふしぎなテーブルかけ。

私、とても知りたいのです。昔話の主人公たちは、その後、どうなったのでしょうか。

本は、限りなく自分の世界を広げてくれる。本は静かに語りかけ、励ましてくれる。

面白い本との出会い、それは、自分との出会い。

本を旅しよう。

明日の自分をつくるために。

勇氣の裏側

盛岡市立城南小学校

六年

太田原

有希（12歳）

「よし、がんばろう。」

私は、ピアノの発表会の舞台裏で、そう思いはじめていた。

そもそも、私がなぜこう思うようになったか。それは、本を読んだおかげなのだ。

その本の題名は、「クララ・シューマン」。彼女は、本によると、小さい時に母親が家を出ていき、大人になってからも、最愛の夫「シューマン」が自殺をしてしまい、悲しいことがいくつもあったという。しかし、彼女はピアノを奏でることが大好きで、ピアノをひき心を静まらせ、つらく、いやなことものりこえた。この「クララ・シューマン」という本を読んだ時のことを思い出し、『よし、がんばろう』という気持ちになったのだ。

このように、本には人を「がんばろう。」という気持ちにさせる力があるのだと私は思う。

これからも、大好きな本を読みつづけたい。そして、いろいろな人の生き方を、もっともっと知りたいと思う。そして、その伝記の強い人たちのように、させつすることなく強く生きたい。

出合いを

釜石市

小笠原

ヒナ子（67歳）

私は若い時分、歴史とか時代物という本や映画に関心がなかった。退職後、幕末維新等に、特に吉田松陰に興味をもち自分の目で松下村塾を見たいと萩を訪ねた。時代を動かした諸氏達がこの小さな部屋で貧しさの中で日本を思い勉強に励んだであろう塾をみて、当時の若者達が如何に大きな夢をもって過ごしていたのかと、思いを馳せた。そして坂本龍馬に只今のめりこんで二回目を読み進んでいる。世の中に目をむけ真剣に世直しをせんと取り組んでる若者達、色々な身分にあり乍ら志をもって一つの道を進んでいくエネルギー、龍馬は常に世界に目を向け、現状を憂いつつも「時」がくるのをジーンと待つ姿に教わるものがあつた。突っ走るだけでない。「時」を待つ事も人生には必要である事を教わつた。

読書には色んな人との出合い、種々な考え方に出合う機会がある。頭の柔軟な若い時に沢山の本と出合つてほしいと思う。

## 孫と祖母の読書

矢巾町 菅原 千代子（81歳）

孫の通う小学校では、十五分読書を家庭学習として位置付け、全校でとり組んでいた。夜になると私は「さあ、おばあちゃんも勉強よ」といって本を上げた。孫は「僕も読もう」とテーブルの前に座った。勿論テレビは消して夜のじじまの中に身をおいだ。熱中すると三十分は瞬くまに過ぎて、孫は就寝の時刻となる。四年生ごろまで毎日続けたらどうか。読書をする環境作りと、毎日継続して読書する習慣化が大事であると思った。

ある時、孫が「おばあちゃん、十二支の中になぜ猫がいないか知ってる？」と問いかけてきた。

私は傍らにあった孫の本に目を通していたが、素知らぬふりをして「教えて頂戴」といった。得意げに語り出した彼の顔が忘れられない。

大学生になった孫は、今でも読書を欠かすことなく、私の読み終えた歴史書を好んで読み耽っているようである。

## 読み聞かせから始まる活字とのふれあい

盛岡市 齊藤 博孝（40歳）

「パパ！今日もこれね！」パジャマ姿の息子が一冊の絵本を抱え私の胸に飛び込んでくる。もう何回読んだであろう。でも彼にとって回数は無関係ない。ただその絵本でなければ駄目なのである。私には見慣れてしまいい何の変哲もない絵本の表紙を今日もめくる。

彼の瞳は爛々と輝く。私はページをめくりながら、登場する子ウサギの気持ちをアドリブで付け加える。彼はお話の続きをいそぐ。子ウサギは絵本を飛び出し彼自身になっているのである。野原を駆ける子ウサギ。母ウサギからはぐれた子ウサギ。そして母ウサギに抱きしめられる子ウサギ。彼は、私が絵本を閉じるその瞬間まで子ウサギそのものである。

安らぎや緊張感、夢や希望を一冊の絵本を通し、毎日違った感性で彼は味わっているのだ。

絵本を閉じる頃、彼は彼自身に戻り、「おやすみなさい。また明日もね」といいながら眠ってしまふ。そしてそこには「明日はどんなふう読んでやるのか」と考えている自分（父親）がいる。一冊の絵本が、忙しさでボツカリとあいた心の穴をふさいでくれたような気がする。私も彼と一緒に子ウサギになっていたのかもしれない。

「読んで。」

玉山村立巻堀中学校 一年 高橋 加菜映（13歳）

小さいころ、夜寝る前にはいつも母に本を読んでもらった。短編を一日一話。これが本との最初の出会いだった。

字が読めるようになって、「おひさま」という雑誌を買ってもらい、物語をいくつもいくつも読んだ。読みきかせとは一味違い、自分で読めることがうれしかった。

だんだん大きくなり、マンガにはまったりもしたが、物語もけっこう読んだ。物語のほつが非現実感があった。伝記も小説もたくさん読んだ。今は古文に挑戦中である。マンガとは違って、古文はわけのわからない言葉がたくさん出てくるので、読みこたえがある。

こんなことができるようになったのも、小さいころの母の読みきかせのおかげである。「読んで」「何読もうか。」という会話がなかったら、今、私の枕元に、本は置かれていないであろう。

「親子読書」のおすすめ

一戸町 鈴木 尚枝（39歳）

娘が通っている小学校では、長期休業中に親子読書に取り組んでいます。親子で同じ本を読んで、娘が通っている小学校では、長期休業中に親子読書に取り組んでいます。親子で同じ本を読んで、感想を話し合ったり、カードに記入しあったりします。この活動は長年継続されて、親子の心の交流が図られています。

昨年の冬休みに、六年生の娘が『まっ黒なお弁当』という本を借りてきました。娘はこの本を読んだ、原爆の恐ろしさに衝撃を受けていました。私も、戦争が生み出した様々な悲しみや苦しみの中で、ますます強まる親子の絆にふれて、涙がとまりませんでした。

そのとき以来、親と子が戦争や核について、話し合うことが多くなってきました。関心のある新聞記事は、繰り返し読んでいます。私たちは、戦争や平和などについてもっと多くのことを学んで、子どもたちへ伝えていく必要があるのではないのでしょうか。

これからも、親と子が同じ本を読み、その内容をテーマとして、お互いにじっくり話し合う時間ももっていききたいと思います。

## 「読書の鎖」

石鳥谷町 佐々木 さつき（34歳）

私は本が大好きです。私の子供達も本が大好きです。こつ書くと「親が本好きなら、子供も好きになるのは当然よねえ」で片付けられてしまいそつですが、ちょっとした事で子供は本を読むようになるのです。それには、「親も子供の本を読む事」です。

我が家では、年長の息子が保育園から毎月絵本を一冊ずつ持って帰ってきます。すると私は読み聞かせるのではなく、私が息子の本を読みます（これが結構面白い）。息子は、自分の本に親が興味を持ってくれたと思い、横から色々と彼なりの解説を入れてきます。その後、ここの絵が可愛かったよねとか、あの言い方もしろいななんて言っておけると、とても喜んで、また本を読むのです。小一の娘も同じです。そうすると今度は、子供が私の読む本に関心を持つようになり、様々な本を読むきっかけに繋がっていきます。これが読書の鎖と言つ訳です。

## 「十五分の子育て」

盛岡市 佐藤 淳子（43歳）

実の母に二人の娘を預けていることを幸いに、好きなだけ仕事に没頭し、宿題の点検も、夕食も、通院すらも母任せにしているあなたを、「世界で一番楽な母親」と言つて私たちは笑つ。あなた（妹）もまた否定するでもなく、「おばあちゃんのおかげです。」と言つて笑つ。とはいえ、あなたの子育ての素晴らしさを、私はあなたの二人の娘から感じている。小学生の二人の姪は、時折「幼少のキュリー夫人」になる。読書に没頭し、背後の大音響にも気づかなかつたというあの逸話である。

大騒ぎをして家中を走り回っていたかと思つと、突然ぴたりと静かになる。床にぺたりと座り込んで、本を読み始めている。三十分、時には一時間も静寂は続く。彼女たちが生まれてからあなたが一日も欠かさなかつた、寝る前の読み聞かせのお陰なのだろう。最近では、私たちが子どもころに読んだ本を物置から見つけ出して読んでいます。

あなたの、就寝前のわずか十五分の「子育て」の大きな成果である。



## 絵本の楽しみ

前沢町 村上 あゆみ（32歳）

夏の暑い日、私と娘は近くの川から大きな石を拾い、庭に小さなかまどを作りました。次に、山で集めた薪で火をおこし、おいしいホットケーキを焼いて食べました。ばくらのなまえはぐりとぐら〜と歌いながら…

これが娘の大好きな『ぐりとぐら』です。他にも、山の中の『たんたのたんけん』も大好き。

たくさん自然に囲まれて、育つ子供たちは幸せ。すつと、絵本の世界に入り込めてしまうようです。絵本は子供にとって（親にとっても）「心の栄養」かな。素敵な絵本をたくさん読んであげたいですね。

ただいま、『コロッケをたくさん作るうー!』と『11ぴきのねことあほうどり』を計画中の我が家です。絵本って楽しいですよ。

## 「子ども時代への鍵」

千麻町 片野 裕子（37歳）

我家には五歳と三歳の娘がおり、彼女達の絵本が百冊前後ある。夫が現役の図書館司書であり、私も元図書館司書なので、それぞれの蔵書で家中本だらけといっても過言ではない。娘達にとって本は生まれた時から身の周りにあるもの一つであり、おもちゃでもあった。うんと幼い頃は読み聞かせというよりも、本と一緒に遊ぶ感じで読んでいたと思う。年齢と共にストーリー性のあるものも聞けるようになり、今では姉が妹に絵本を読んでやることもある。

「子どもを本好きに。」と気合を入れる必要はないと思う。「本は楽しい、本はこんな風に役に立つ。」と親が本に親しむ姿を見ていれば、子どもも本に抵抗感を持たないと思う。

親が子どもに本を読んであげることとは、一冊の本を通じて親子で共通の歴史を持つということだ。そして後々その本は子ども時代へタイムスリップする鍵になると私は思っている。

わが子を本好きにするために

遠野市 佐藤 園子（52歳）

わが子を本好きにする第一歩は、読み聞かせ。ひぎにしっかり抱いて読んでやる。夜は布団の中で、すぐに寝てもよし。寝入るまで読んでやる。やがて、好きな絵本を手に「読んで。」とせがむようになる。幼児はみんな本が大好き。幼児期は読み聞かせに徹する。

小学校に入学し、一人でも読めるようになる頃が第一の関門。ここで突き放してはいけない。子どもが「読んで！」とせがんだら、どんなに忙しくてもすぐに読んであげる。「あとでね。」は禁句。チャンス逃します。

第二の関門は、テレビの誘惑との闘い。これは手強く最大の難関。テレビ視聴の約束を守らせ、読書の時間を確保することが、本の魅力にとりつかせる最良の策。規則正しい生活習慣の確立がすべてを決める。

最後は、よい本を選ぶ目と心。本屋や図書館にせつせと通い、魅力ある本を見つけ、親子で読書タイム。

これが、わが子を読書好きにする方法です。

「母から子への贈り物」

花巻市 鎌田 智子（44歳）

私は、三人の娘に母からのプレゼントとしてたくさん絵本を読んでもあげました。遊んだ後、出かける時、昼寝や夜寝る前等、いつも絵本がそばにありました。お母さんのひざの上で子供は知らない世界を経験し、様々な絵本から蓄えた言葉と想像力が、いつしか自分の言葉となり、自分の世界を大きく広げていくのだと思います。

次女が九才の時、家に帰る車の中の事です。沈んだばかりの太陽が、あたり一面をオレンジ色に染めています。その中を飛行機が静かに高度を下げ滑走路へ滑り込んできました。「お母さん、今まで離ればなれになっていた人が、あの飛行機で帰ってきたようだね。」その風景は空一面に広がった絵本の一ページのようでした。娘はその美しい一ページに、心が暖かくなる様な物語を思い描いたのでしょう。

我が子の世界が大きく広がる可能性を信じ、母になった日、新しい生命が芽生えた日から、絵本を優しく語りかけて下さい。

『子どもを本好きにするために…』

紫波町 後藤 尋子（36歳）

私には、現在小学二年生、一年生、生後四ヶ月の三人の子どもがおります。子どもを読書好きにするために私が実践した事は、毎晩寝る前に絵本を読む。寝室と、居間に本棚を設け本を置く。（本棚の本は、時々別の本と入れ替える。さらに自分が読ませたいと思う本をさりげなく、子どもの好きな本の中に混ぜておく。）とにかく小さい頃から図書館に連れて行き、昔話などの本を中心に本を借りる。この三つです。

私は今も子育て真っ最中ですが、上の子ども達が幼い頃は、慣れない育児に必要以上に子ども達を叱ったり、ヒステリーになっていたとつくづく反省しています。そんな子育ての中、就寝前の子ども達との読書の時間はとても大切なものだったと思います。「ああ、今日も一日なぜあんな小さな出来事に腹を立て子ども達を叱りつけてしまったのだろう…」と、子ども達に申し訳なくなるのですが、一日の終わりに、「ごめんね。」の気持ちを込めて、せめていい夢を見てね…と優しい気持ちで読んであげる本は、私にとって子ども達にとっても、心の安定剤になっていたと感じています。

そして今は、上の子ども二人は本当に本が好きな子どもになりました。私が何も言わなくても、毎日読書をしています。そして子ども達は「本が大好き！」と言ってくれています。まだ、四ヶ月の子にも、たくさん本を読んであげたいと思っています。

今日もまた、子供と一緒に

盛岡市 丸山 ちはや（38歳）

マジックアイという3Dアートの本の頁を開いてじっと見ていると、最初は何やらわやわやと点在していた画面がぼやけてきて、ふうつと遠のいていく。すると突然今までそこになかった物体が浮かび上がって、まるで違った世界が出現する。

読書とはこんな現象に似ている。表面的には紙とインクと文字だけなのに、読んでいくうちに、その中に繰り広げられる別の世界を生きる。私たちの人生は、出会う人も行く場所も生きる時代も限られている。しかし、読書を通じて、様々な感情や人生を体験できる。その蓄積が豊かな人間性を育てていく。

「ママね、こんな本読んで、こんな風に楽しかった（悲しかった、こわかった）よ」と親が子供に語ってあげれば、それは子供にとって、すてきな時間であり、出来事になるでしょう。

まずは、大人が読書の3D世界に子供と一緒に入り込んでみませんか？

我が家では、毎日台所で、お風呂で、居間で、ふとんの中で、色々な世界へ子供を連れて、旅に出かけています。

## 「一日十分間」の読み聞かせ

一戸町 千葉 典子（37歳）

私は、学生時代に絵本の素晴らしさを知りました。自分に子どもができたなら、必ず絵本を読んでやりたい、と思っていました。

そしていま、三人の子どもたちに、毎日十分間絵本の読み聞かせをしています。時々、「お話し会」のように手あそびを加えたり、「ミニ劇場」風にエプロンなどの小道具を使ったりすると、子どもたちは、とても喜んでくれます。こんなとき、子どもと向き合うことの大切さに、改めて気付かされます。子どもたちも、色彩豊かで、やさしいことばの絵本が大好きになり、読み聞かせの時間を楽しみにしています。

たった十分間ですが、毎日仕事に追われる生活の中で、この時間を確保することは、想像していた以上に難しいものです。でも、心豊かな子どもたちの成長を願って、続けていくつもりです。

「子どもたちが本を読む地域は、未来が輝く」と言われます。

あなたも、私と一緒に「一日十分間の読み聞かせ」にチャレンジしてみませんか？

## 甦る母へのおもい

陸前高田市 中山 圭子（68歳）

メリーゴーランドぐるぐる、キリンもゾウもまわってる、ぼつやもいっしょにぐるぐる。幼い日、母の膝で聞いた絵本の一節である。活字など読めるはずのない私が、一冊の本をすり切れるまで持ち歩き、耳で覚えた文章を得意になって来客に聞かせていた頃が甦ってくる。

当時一冊の本は宝物だった。母は家事を終えると、私を膝にのせて読み聞かせを始める。母との唯一のスキンシップの時だ。一冊の本を買うことも贅沢と思われた時代であったが、父の机の上には何時も本が積んであり、勤めから帰れば本を読みふける父の姿があった。

そんな環境の中で、いつしか本に魅せられた私は、中学生の頃は、少女小説に熱中し、夜通し読みつづけることもしばしばであった。

長じて母となり、農作業の合間に、田の畔で、畑で、床に入ってからもせがまれるままに長女への読み聞かせが続く、そのせいか長女は本好きの子に育ったようである。

読むことは、より多彩な人生に人を誘うのであるつか。今も自作の寸劇を仲間と共に演じたり、時折り帰省する孫達に読み聞かせをせがまれ悦に入っている私である。こんな自分をつくってくれた母への感謝を私は忘れない。

## 「八時の約束」

盛岡市 柴本 弘子（41歳）

「八時に布団に入らないと、ご本を読んであげないよ」という約束をしたのは、幼稚園に入った時だった。夕食をして、お風呂に入って、歯磨きをして。いっばいやることがあって、そのどれも一人じゃ出来なくて大変だったけど、今日はどんなお話かなと、ひたすらそれを楽しみに頑張る娘。時には見たいテレビを見すぎて間に合わず、くやしいと大泣き。こっちも絵本の読み聞かせ、たかが十分くらいのことなのに、「疲れている」と読んであげなかったり。

- 35 -

小学生になった今は、ほとんどのことを一人で出来るようになったけれど、その分やりたいこともいっぱい。忙しい毎日だけれど、今のところ、この八時の約束は守っている。最近はずっと文字の多い本で、読む方も大変だけれど、娘が頑張っている以上、こっちも頑張って読んであげよう。でも、八時の約束、そろそろもう少し遅くしてもいいかな。

## 絵本は心のつぼみ

東和町 及川 典子（56歳）

「どれにしようかな」「ばくカラスのパンやさんかいるよ」「幼稚園の図書二二〇〇冊、それが置かれている廊下を行ったり来たり、本を選ぶ楽しさを味わっている。「バーバパパのがっこうはどこだっけ」と本の名前がざらっと口に出る。

- 36 -

絵本の貸し出しは毎日なので生活の一部になっていて、偏りのないようにとその子の興味に応じて更に一冊担任が選んであげる日もある。嬉しい事に、図書ボランティアの手をかりての地域貸し出しが定着しつつあり、アドバイザーが参考になる。楽しそつに会話する親子連れや孫と一緒に接し、今子育てに足りないものがここにあると感じる。膝に抱っこされ絵本の中に吸い込まれる幼心を大切に育てたい。こうした絵本との出会いがその子の将来にどう関わっていくのかは見えずとも、いつか咲く心の花のつぼみでありたい。

「絵本かしてください」今日も絵本バックを手にした可愛い子が玄関に立っている。

「読書を遊びのひとつとして」

久慈市 矢幅 寿美（41歳）

娘が生まれた時、絵本の楽しさを味わわせてやりたいと思い、玩具と一緒に赤ちゃん絵本を買った。そして、生後二ヶ月位から寝転んで読んでやった。赤ちゃんでも絵は喜ぶ。反応が私も面白かった。そのうち彼女自身でページをめぐることを楽しむようになった。そうして、本と遊びながら一緒に育っていった。

家庭の中で「本」が特別個な存在ではなく、玩具と同じように、楽しく身近な存在であれば、子供は自然に本を好きになる。玩具と並べて絵本を置いたり、興味のある分野の本から揃えたり、飽きのこない質の良い本を選んだり、工夫は必要だ。あとは「読んで」と言われればいつでも読んでやり、たまには熱演して一緒に楽しんでしまおう。

今、四歳の息子は、車に飽きるとお気に入り絵本を出して眺めて楽しむようになった。九歳になった娘は、最近本の「字」の中に広がる世界の面白さにはまっている。

「大人でも感動できる絵本」

東山町 白井 昭二（44歳）

小学二年の娘が、「お父さん、本屋さんに行こう」と話してくる。

娘の目的はマンガ本、しかし、今回は遅くなり売れ切れ。娘はガツカリした様子である。

「お父さんのほしい本も売り切れてるよ」そして娘は、店内を回りこの絵本がほしいと言いだした。そして、娘が持っていた図書券と、足りない分を私がだすことになった。

帰り、車の中で、「この絵本、お父さんと私の本だよ」と言うのだ。なるほど、たりない分のお金を出したからであろうと思った。数日後、「お父さん、絵本見た」と話しかけられる。しかし、まだ読んでいないため絵本の話ができない。その夜、遅くまでかかり読んだ。「あの子かわいそうだな」娘が、「きつと助かるんだ」と話す。娘のやさしい気持ちを感じた。娘と一緒に買った本、一冊の絵本を通し大人でも感動できる絵本の素晴らしさを教えて貰った気がした。

今も、親子で一冊の本を買って読み続けている。

## 幼い世界の読書論

宮古市 前川 克寿（27歳）

「もうそれは読んだでしょ。」という声を聞くことがある。場所は子供図書室。一度借りたことのある本を再び選んだ子どもに対する、保護者の第一声である。人と書物が出会う場所で仕事をしていて気持ちが沈むのは、こういう時だ。未読の本、より高度な本へと子供を導きたいという親心は充分理解できるが、それでも一度選んだ本を書棚に戻す子どもの姿を見るのは辛い。

子どもの時分、私には愛読書があった。ブリッグズの『さむがりやのサンタ』という本だ。幼い私はその本に描かれた冬の寒さに恐れをいただき、皮肉屋のサンタの活躍に目を細め、サンタが帰り着くマイホームの温もりに安堵の息をもらした。

今思うと、なぜあんなに夢中になって繰り返し読んだのかを不思議に思う。ただ、おそらく子どもは、同じ物語を繰り返し読むという体験を通して、安心感のようなものを得ていたように記憶する。

だから、子どもが同じ本を何度も読んでいてもそのままにして欲しい。繰り返しの読書とは子どもにとって、明日が今日のようにあること、この世には確かなものがあること、確認作業かもしれないのだから。

「老いても心は豊かに」

盛岡市 佐藤 セツ（66歳）

我が家の孫は、三才と十ヶ月の本大好きな二人の女の子である。お母さんは子どもが誕生した時から枕元に絵本を置いていた。触っても痛くない、ふわふわした布絵本である。動物、お花、果物、お菓子他いっぱい描いてある。見ていて、楽しく美しい絵本だ。どの孫も独り坐りできるようになると、絵本をじっと見入っていた。ゼロ歳にも好きな本やページがあることに感心した。お母さんは、いろいろな本を時間を見つけ、抱っこして読み聞かせをしている。動物はその鳴き声で、お花は美しいように、お菓子は食べたくなるような読み方だ。これが親子の温かいコミュニケーションでの原点ではないかと思う。上の孫はまだ字は読めないが、おばあちゃんに本を読んであげると私の側に坐り、表情も豊かに、身ぶり手ぶりでお話する。そのお話に吸い込まれていく私。心が豊かになるひと時だ。

私「おもしろかった、ありがと」。孫「また読んであげるね」と得意気だ。

世のお母様へ。機会があることに子どもに本を読んであげて、本を大好きにしてほしい。豊かな心が育まれることであろう。本の読み聞かせの大事さを孫から教わった。

# 『読書のススメ～子どもたちへ、そして親たちへ～』募集要項

- 趣旨  
幼児期から本の楽しさにふれ読書習慣を身に付けていくことは、子どもたちの心豊かな成長に欠かせません。  
親子はもちろんのこと、県民全体があらためて「読書」について考える契機とするため、教育振興運動の取り組みの一環として提言やメッセージを広く募集し、読書への関心を高め読書活動の推進を図ります。
- 主催  
岩手県教育委員会
- 対象  
県民の方であれば、どなたでも応募できます。積極的に御応募ください。
- テーマ  
「読書のススメ～子どもたちへ、そして親たちへ～」  
「読書の魅力や大切さを確かめる」、「本に親しむようになるために」などをテーマとして、自らの体験をもとに、日ごろ考えていることや感じていることを提言や応援メッセージとしてお寄せください。  
なお、表題は自由ですが、応募部門を次のどちらかに決めてください。

応募部門	応募作品の主旨
(1)【「子どもたちへ」の部】 (子どもたちへのメッセージ)	子どもたちへの提言や応援メッセージで、読書に取り組む動機付けとなるような内容を期待します。
(2)【「親たちへ」の部】 (保護者へのメッセージ)	わが子を本好きにさせたいと願う親たちへの提言や応援メッセージで、家庭教育(子育て)としての我が家の取り組みなど、具体的に取組みめるような実践の紹介等を期待します。

- 応募受付期間  
平成15年8月1日(金)から9月16日(火)まで
- 応募作品及び応募方法  
(1) 応募作品の形式は自由ですが未発表のものに限ります。字数は400字程度を上限とします。  
(2) 応募方法は、はがき・封書、または電子メールでお願いします。  
【はがき・封書の場合】  
・縦横自由。はがき以外の用紙は、できるだけA4サイズか400字詰原稿用紙にしてください。なお、読みやすいように楷書(かいしょ)でお願いします。  
【電子メールの場合】  
・作品ファイルを添付して送付してください。なお、ファイルは「Word(ワード)」または「太郎」形式とし、A4縦・横書設定としてください。  
(3) 応募作品には、「応募部門(「子どもたちへ」の部、または「親たちへ」の部)」「作品のタイトル」「郵便番号・住所・氏名(ふりがな)・年齢・職業・電話番号」を明記してください。  
また、可能な場合は、「FAX番号や電子メールアドレス」も併せてお知らせください。

- 応募先  
【はがき・封書による応募の場合】  
〒020-8570 盛岡市内丸10-1(郵便番号があれば住所がなくても届きます)  
県教育委員会事務局生涯学習文化課 あて

【電子メールによる応募の場合】  
(半角・小文字)  
DB0005@pref.iwate.jp \*「0005」は全て数字です。  
(半角・大文字)

- 審査及び表彰  
(1) 審査  
応募のあった作品について審査委員会で厳正に審査し、最優秀賞4編(各部門2編) 優秀賞6編(各部門3編) 佳作30編程度を選考します。  
なお、審査委員は、岩手県教育委員会教育長が委嘱する4名をもって充てることとします。  
(2) 通知  
入選者への通知は、直接本人に行います。  
(3) 表彰  
最優秀賞及び優秀賞の入選者に対しては、記念品を贈るとともに、11月12日(水)開催の「平成15年度教育振興運動推進県大会」(遠野市会場)において表彰する予定です。
- 問合せ先  
県教育委員会事務局生涯学習文化課(生涯学習主査)  
TEL 019-629-6176(直通) FAX 019-629-6179  
E-mail: DB0005@pref.iwate.jp
- その他  
(1) 入選作品に関する著作権は、岩手県に帰属します。  
(2) 家庭を中心とした読書活動推進の取り組みの奨励を図るため、最優秀賞以下の入選作品(40編程度)を冊子『読書のススメ～親たちへ、そして子どもたちへ～』(仮称)として刊行し、県内各地へ配布する予定です。  
(3) 冊子編集の都合上、作品の主旨を踏まえて、字句等の修正を加えることがあります。  
(4) 応募作品は返却しません。

## 【審査委員会名簿】 敬称略、50音順

- 委員 あかざわけいいちろう 赤澤桂一郎(県立図書館協議会委員、県書店商業組合理事長)
- 委員 いとう まさる 伊藤 勝(県教育委員会教育次長) \*委員長
- 委員 なかおみちこ 中尾美知子(県社会教育委員、県立大学社会福祉学部助教授)
- 委員 ふくおか えつこ 福岡 悦子(県家庭教育資料作成委員会委員、(株)岩手日報社客員論説委員)
- 委員 よしかわ けんじ 吉川 健次(県教育委員会事務局生涯学習文化課長)
- 委員 よしまる ようこ 吉丸 蓉子(県社会教育委員、盛岡市立桜城小学校長)